

複写資料「枝幹二大尉の遺書」の原本調査

坂元 恒太

はじめに

知覧特攻平和会館では、約一万五千点の資料を収蔵し、そのうち遺書・手紙・遺詠・日記・寄せ書き等の紙類は約四千五百点を数える。その中には、特攻隊員直筆の実物資料以外にも、複写資料や模写資料も一部含まれている。

複写資料や模写資料を収蔵した経緯には、当館が対象としてきた、太平洋戦争末期の沖繩戦における陸軍航空特攻作戦で戦死した特攻隊員の遺品という資料群に特有の事情があった。それは、これらの資料群は、戦没者の遺族が保管してきたものであり、原本は手元に置いておきたいという理由から、複写や模写という形で収蔵されたケースがあったのである。

近年では、当館が開館した三十年前に比べ遺族の高齢化や世代交代が進む中、大切に保管されてきた遺品が当館へ寄贈されることも増えつつある。そのような中であって、当館収蔵の非原本資料、とりわけ複写資料の資料的価値について整理しておく必要性を感じていた。そこで、当館で陳列している複写資料のうち、由緒が明らかで、かつ原本の所在が明らか、枝幹二大尉の遺書の複写資料について原本調査を行った。

この調査の過程で、松原洋子氏の研究論考の存在を知った。同研究によれば、一般に流布されている枝幹二大尉(注)の遺書の内容は、「知覧特攻平和会館から出された本」に掲載された内容と、富山縣

護国神社の原本の内容とにおいて違いがあるという。筆者は、当館に勤務する者の責務としてこの指摘を真摯に受け止め、それと同時に当館陳列資料について詳細に紹介することで説明責任を果たしたい。その上で、富山縣護国神社に奉納され同神社遺芳館にて保存・展示中の原本についても、同神社の御厚意により、併せて資料紹介をさせていただく。

本稿の目的は、枝幹二大尉が書き残した遺書を、正しく後世に語り継いでいくことである。原本資料が半永久的に保存されていくことを願うと同時に、複写・模写資料についても収蔵経緯を明らかにすることで資料的価値が付与されることを望むものである。

一・調査の経緯と経過

(一) 原本の所在調査に至る経緯

「枝幹二大尉の遺書」の原本資料は、富山県富山市に位置する富山縣護国神社に奉納されている。このことを筆者が知ったのは、平成三十(二〇一八)年夏ごろのことであった。以前からその存在を認識していた当館館長が、同年八月に富山縣護国神社の遺芳館を訪問し資料を見ている。その折に、同神社から発行された富山縣護国神社創建九十周年記念誌『遺芳録』に、遺書の文章が掲載されていることも知り得た。館長による所在確認調査を受けて、筆者は複写資料と原本資料の比較調査を計画した。

(二) 先行研究・関連文献

枝幹二大尉の遺書が世に知られることになったのは、平成元(一九八九)年に発行された、村永薫編『知覧特別攻撃隊』が契機だと思われる。有限会社ジャプランから発行されたもので、知覧特

攻平和会館収蔵の遺書や手紙、日記などを採録した特攻隊員の遺稿集である。後述する松原氏の研究論考では具体的な文献名を示してはいないが、「知覧特攻平和会館から出された本」と表現されているものに該当すると推測している。編者の村永氏は、元知覧町役場職員で図書館長や総務課長を歴任し、後に知覧町文化財保護審議会委員を務めていた人物である。なお、本書は現在、ジャプランの高岡修氏の改編により平成二十一（二〇〇九）年より『新編知覧特別攻撃隊』として再出版されている。

平成十三（二〇〇一）年に富山縣護国神社から『遺芳録』が発行されているが、非売品のため、関係者を中心に配本されたとみられる。同書には、戦没者を祭神とする同神社に奉納された「遺書」を活字化して収録されている。「枝幹二命」については、「備忘録より」と題して昭和二十（一九四五）年六月三日夜の記述と、「黒表紙の手帖より」と題する六月五日の記述が採録されている。

（三）富山縣護国神社の訪問

文献資料を探す中で、東京学芸大学附属小金井中学校『研究紀要』第五十二号に掲載された先行研究会に出会った。著者の松原氏は、「枝幹二氏の遺書」を平和教材として教材開発する中で、平成二十七（二〇一五）年八月七日に調査した結果として、いくつかの問題点を提起されており、松原氏の研究報告により、枝幹二大尉遺書の原本資料と複写資料の相違点が指摘されていた。

このことを踏まえて、筆者は、令和元（二〇一九）年十月二日に現地を訪問した。富山縣護国神社の遺芳館にて、梅野宮司の御厚意により、資料調査をさせていただいた。調査の内容は、展示ケースの中から資料を取り出していただき、毛氈の上に広げて各頁を熟覧し、計測と写真撮影を行った。

二．問題の所在

表1 松原洋子氏が指摘した問題点

	知覧特攻平和会館	富山縣護国神社
①	六月の知覧は	六月のチランは
②	小鳥の声がたのしさう [俺もこんどは 小鳥になるよ]	[小鳥の声がたのしさう 俺もこんどは 小鳥になるよ]
③	本日十三時三十五分	本日一四、五五分
④	原稿用紙三枚に書いた	黒い手帳に書いた。

松原氏が指摘した問題点は、表1のとおりである。

松原氏は、原本資料を調査することによって、①②については知覧特攻平和会館側の記載が誤りであること、③は元々「一四、五五分」と書かれていたが鉛筆で見え消しして「十三時三五分」と書き加えられていた上に、表記も「三五分」を「三十五分」と変更されていることを指摘している（ただし、筆者の手元にある改訂版では「一三時三五分」となっている）。さらに、鉛筆の加筆は他にもあり、「6・5」と書

かれている日付の5を見え消しして「6・6」として、「六月五日は暴風の為中止となり 六月六日となった」という記載が添え書きされている、これらの加筆は、枝大尉の遺品を家族の元へ届けた整備兵の末永氏が書き記したものであることをつきとめている。残る最後の問題点④については、原本資料は黒い手帳であり、「知覧特攻平和会館に奉納されたものは、確かに原稿用紙3枚である。つまりどなたかが黒い手帳の文章を別の原稿用紙に書き起こしたということになる。」と結論付けている。

本稿は、松原氏が問題提起した原本資料と複写資料の相違点を踏まえて、原稿用紙に転記された資料の内容をあらためて比較検証することを主題とし、複写資料の資料的価値についても考えてみたい。



写真1 富山縣護国神社

- 資料① 備忘日記（遺書）
- 資料② 黒表紙の手帖（最後の記）
- 資料③ 万年筆
- 資料④ シガレットケース
- 資料⑤ ノート類
- 資料⑥ アルバム
- 資料⑦ 戦友から遺族への手紙
- 資料⑧ 裏書きのある写真2葉

（一）富山縣護国神社資料
 神社に奉納された戦没者の遺品や遺書・手紙などは、敷地内に建つ遺芳館に保管・展示されている。枝幹二大尉の遺品及び関連資料は、次のようなものがある。なお、本稿では、筆者が便宜的に付した資料番号及び資料名を用いた。



写真2 富山縣護国神社に奉納されている枝幹二大尉の遺品



写真4 資料①備忘日記（遺書）
 18.4×12.8cm



写真3 資料②黒い手帖（最後の記）
 11.5×17.0cm



写真5 資料③④万年筆とシガレットケース
 長さ13.8cm／8.6×9.7cm

三. 資料紹介

本稿では、このうち、資料①の該当箇所及び資料②の全文を、以下に紹介させていただきます。

資料① 備忘日記-1

(最終日の記述)

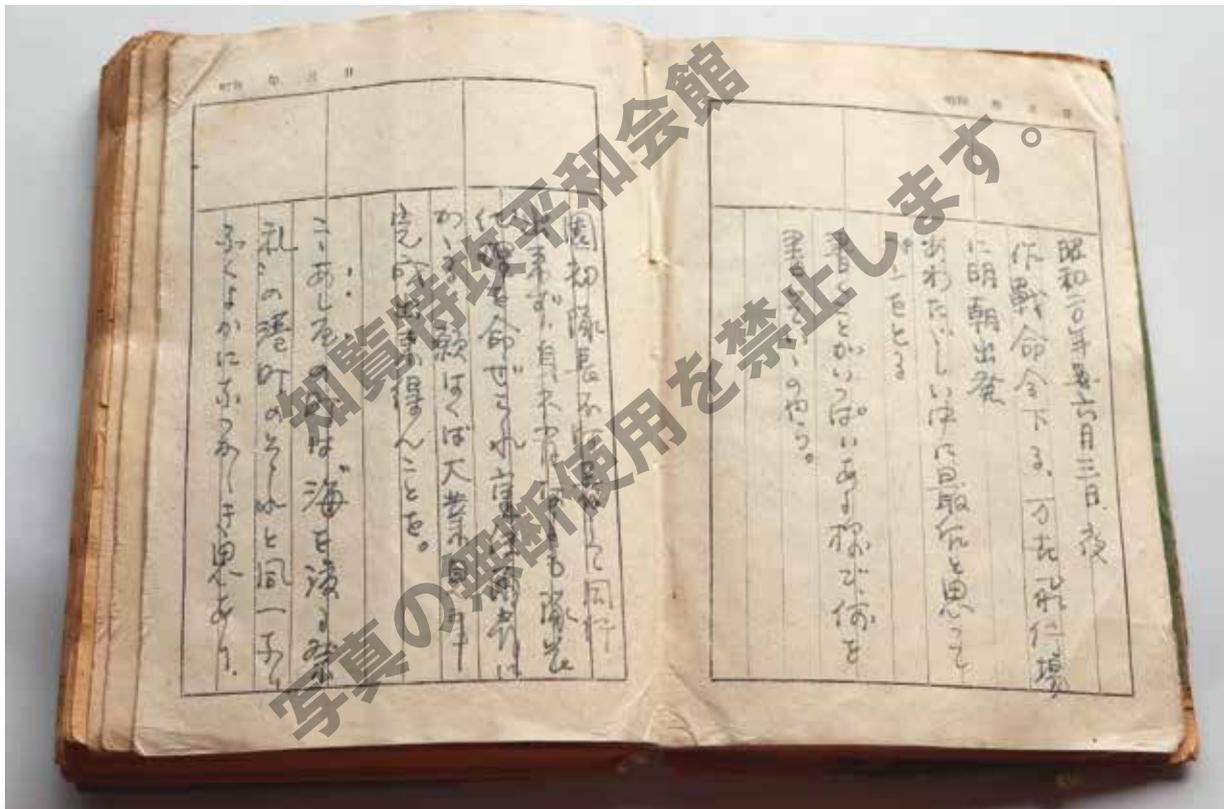


写真6 6月3日の日記1~2頁目

昭和二〇年五月三日、夜
 作戰命令下る。万世飛行場
 に明朝出發
 あわたゞしい中に最後と思つて
 ペンをとる
 書くことがいっぱいある様で、何を
 書いていゝのやら。

園部隊長不時着して同行
 出来ず。身不肖なるも隊長
 代理を命ぜられ重任両肩に
 かゝる。願はくば大業見事
 完成出来得んことを。

このあし屋の町は、海を渡る祭
 礼の港町のそれと同一なり。
 ふくよかになつかしき思あり。

資料① 備忘日記 - 2
(最終日の記述)

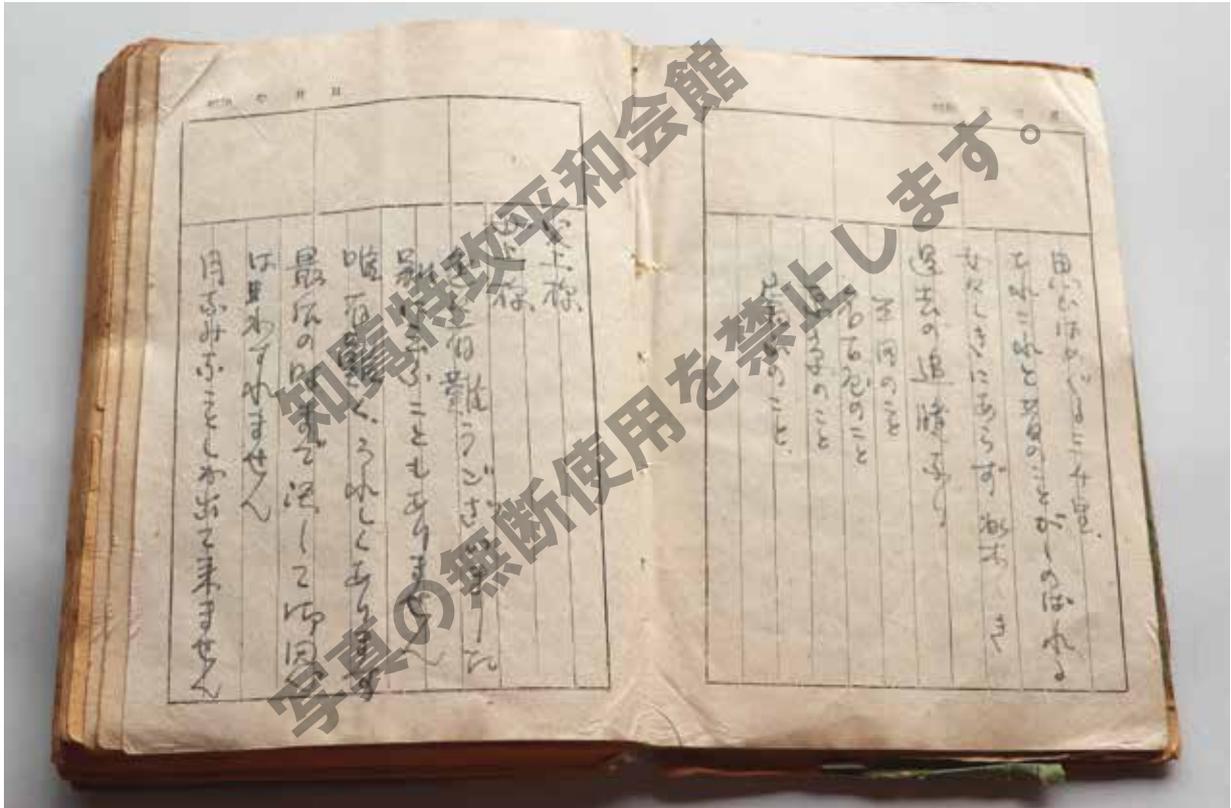


写真7 6月3日の日記3~4頁目

思ひはめぐる三千里
あれこれと昔のことがしのばれる
女々しきにあらず楽しき
過去の追憶なり。

半田のこと
名古屋のこと
東京のこと
富山のこと。

父上様

母上様

色々有難うございました
別に云ふこともありません
唯有難く、うれしくあります
最後の時まで決して御恩
はわすれません
月なみなことしか出て来ません

資料① 備忘日記 - 3

(最終日の記述)

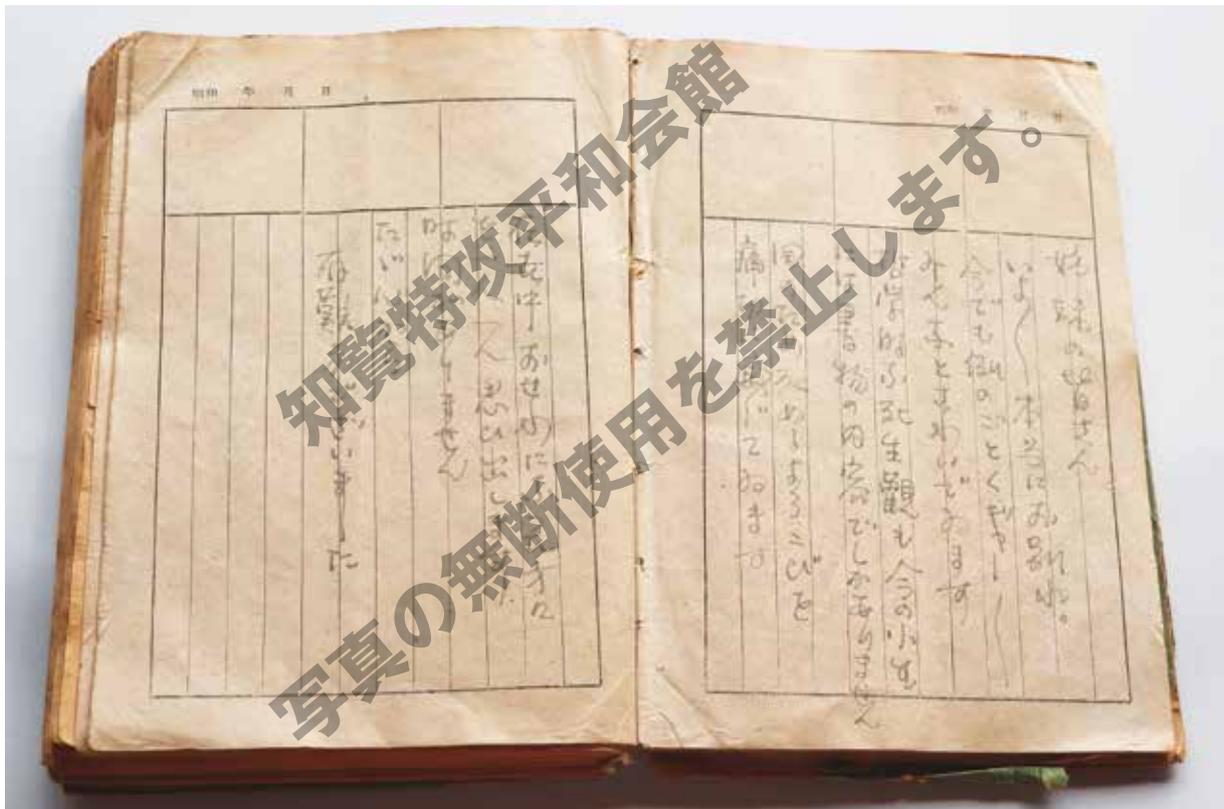


写真8 6月3日の日記5～6頁目

姉妹の皆さん

いよ／＼ 本当にお別れ。
今でも例のごとくギヤ／＼
みんなとさわいでゐます

哲学的な死生観も今の小生
には書物の内容でしかありません
国のため 死ぬるよろこびを
痛切に感じてゐます

在世中お世話になつた方々
を一人一人思ひ出します。
時間がありません
たゞ心から
有難うございました

資料① 備忘日記 - 4

(最終日の記述)

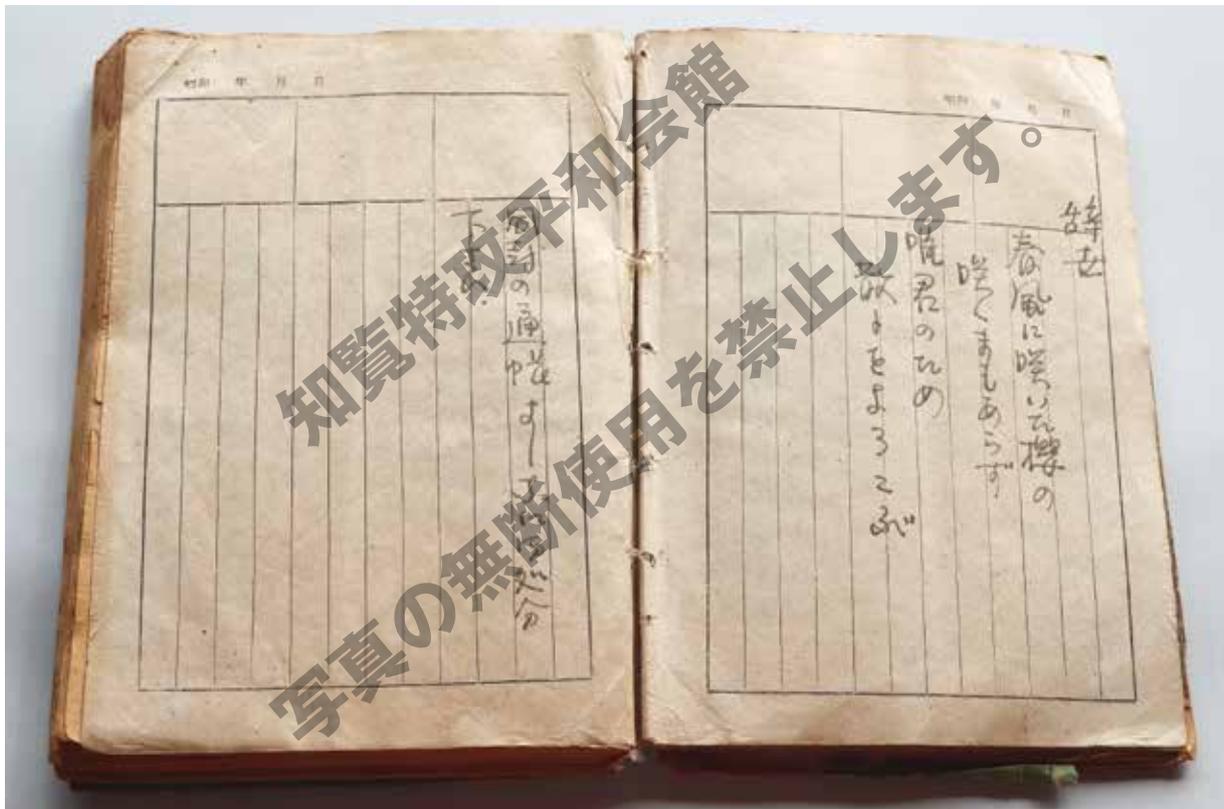


写真9 6月3日の日記7～8頁目

辞世

春風に咲いた櫻の
咲くまもあらず
唯君のため
散るをよろこぶ

同封の通帳よしなに御処分
下さい。

資料① 備忘日記 - 5

(最終日の記述)

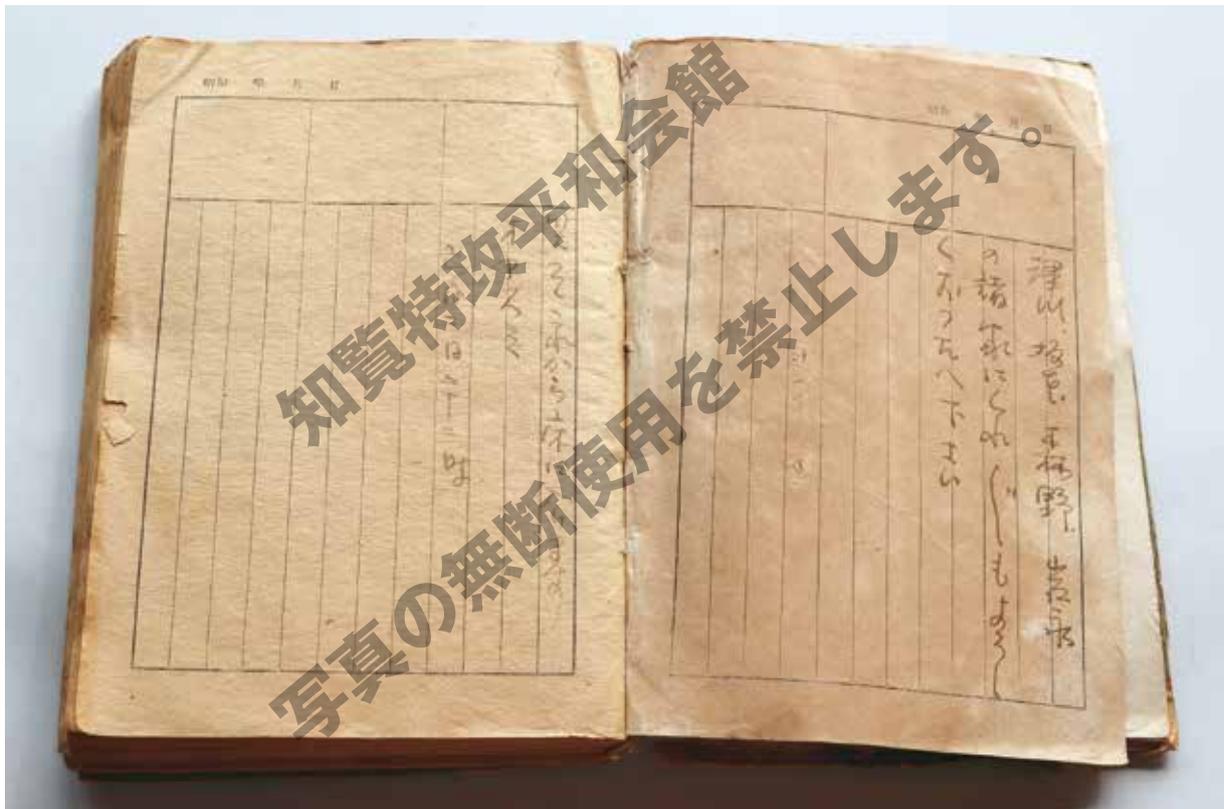


写真10 6月3日の日記9～10頁目

津川、坂本、森野、岩永
の諸家にくれぐもよろし
くおつたへ下さい

笑ってこれから床に入ります
オヤスミ

六月三日二十三時

資料② 黒表紙の手帖 - 1

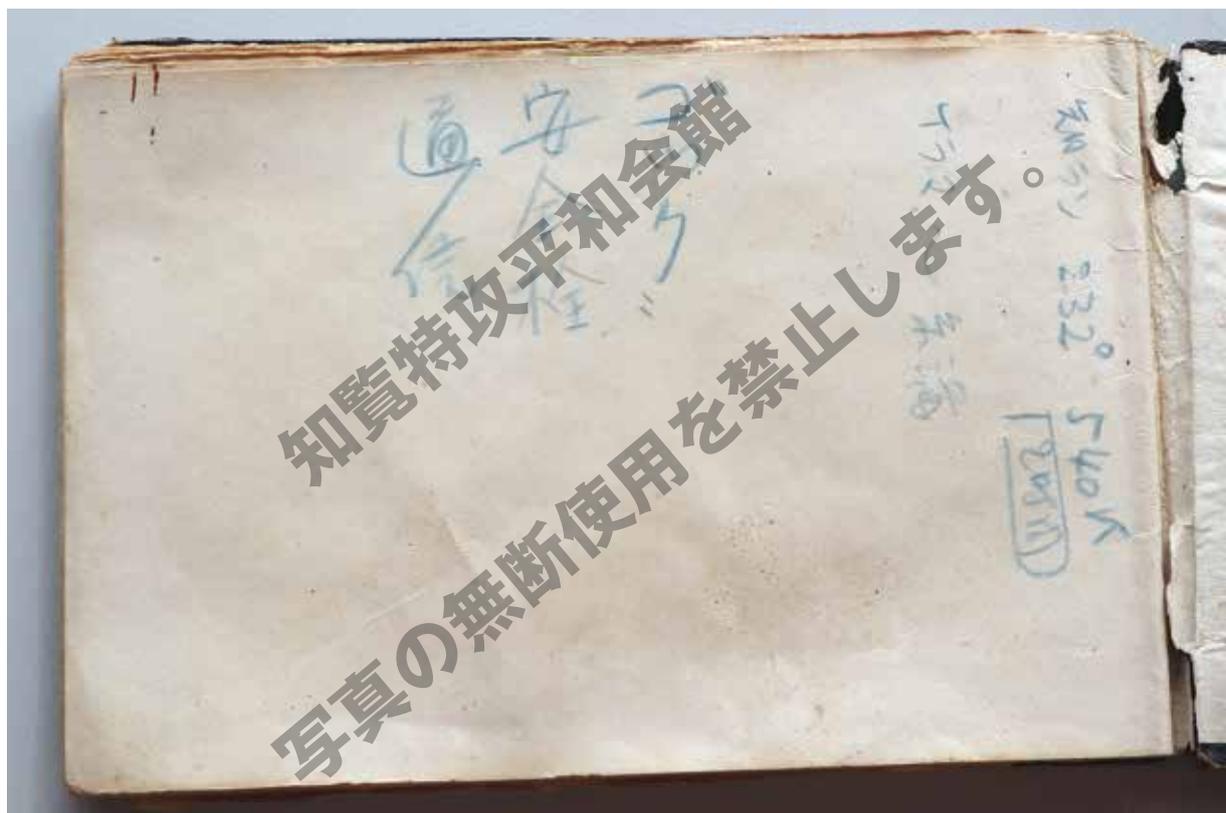


写真11 黒表紙の手帖1頁目

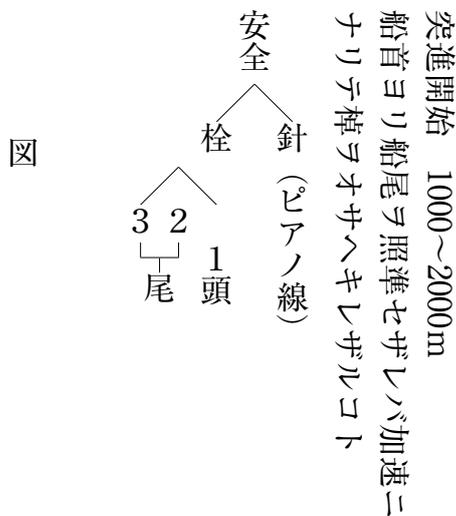
知ラソ 232° 540k
ケラマ〜東海
2時間
通信
安全栓
通信

資料② 黒表紙の手帖 - 2



写真12 黒表紙の手帖3頁目

ピアノ線ハ一番カタイトコロカラ半廻転ユル
 メタルトコロニテサス



資料② 黒表紙の手帖 - 3

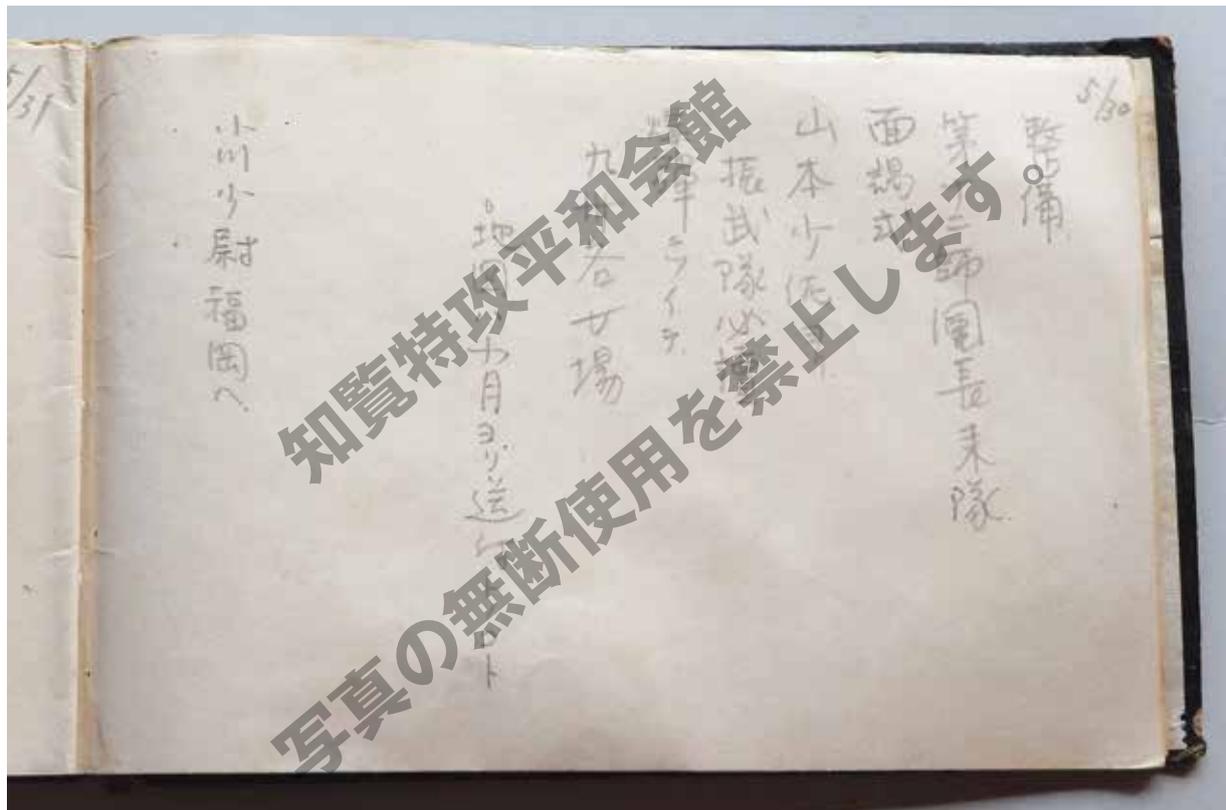


写真13 黒表紙の手帖4頁目

小川少尉福岡へ

○地図ハ小月ヨリ送付トノコト

九州各□場

爆弾ニツイテ

振武隊必讀

山本少佐ヨリ

面謁式

第十二師團長来隊

整備

5 / 30

資料② 黒表紙の手帖 - 4

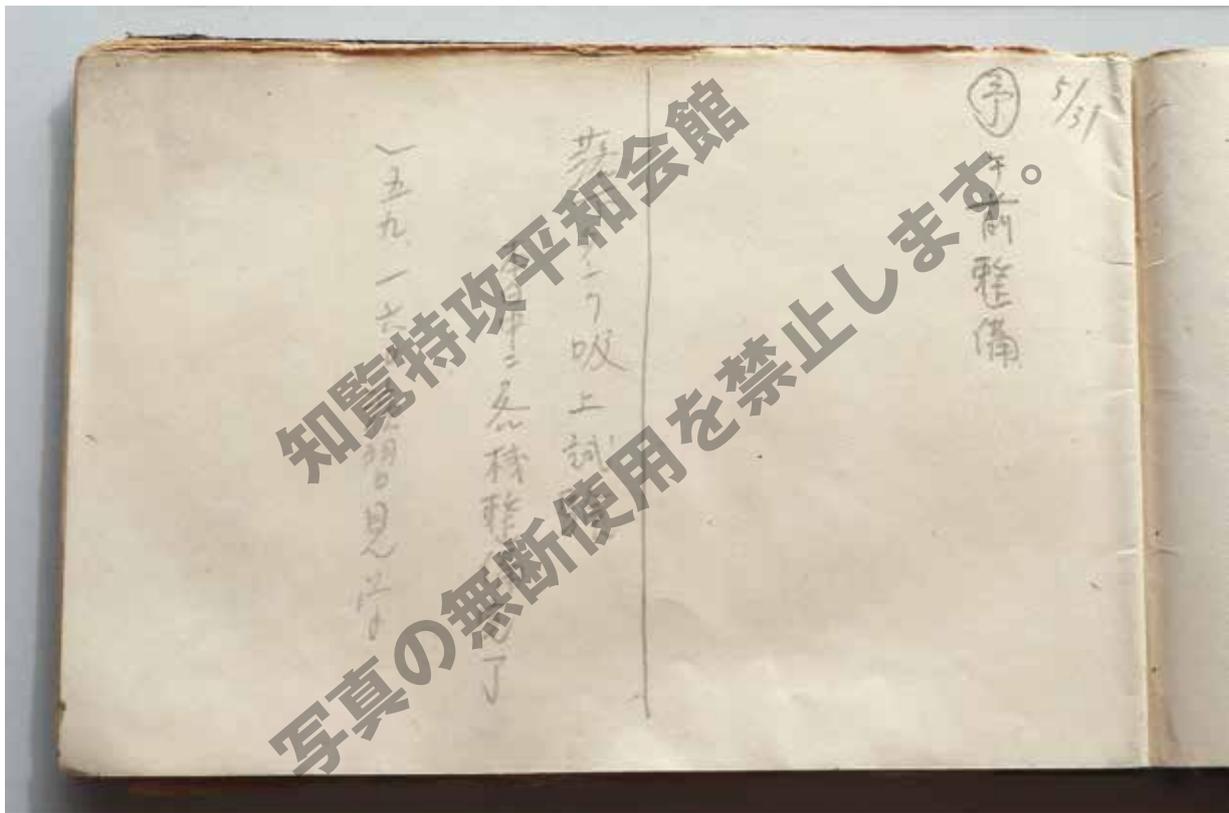


写真14 黒表紙の手帖5頁目

✓五九・一六〇 演習見学

落下タンク吸上試験
本日中ニ各機整備完了

⑤ 午前整備

5 / 31

資料② 黒表紙の手帖 - 5

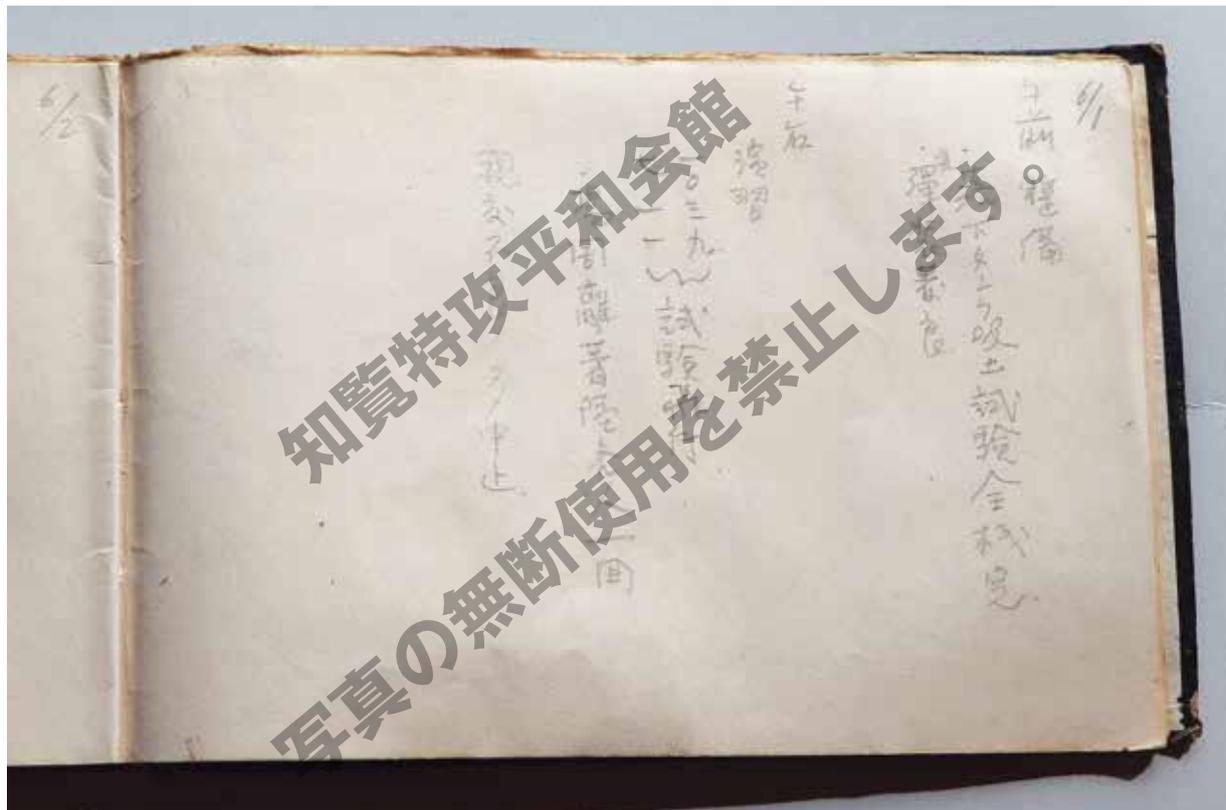


写真15 黒表紙の手帖6頁目

6 / 1

午前 整備

- ・落下タンク吸上試験全機完
- ・弾装置良

午後

演習

一〇三九

七一一

〔試験飛行〕

- ・場周離着陸各人一回

視界不良ノタメ中止

資料② 黒表紙の手帖 - 6

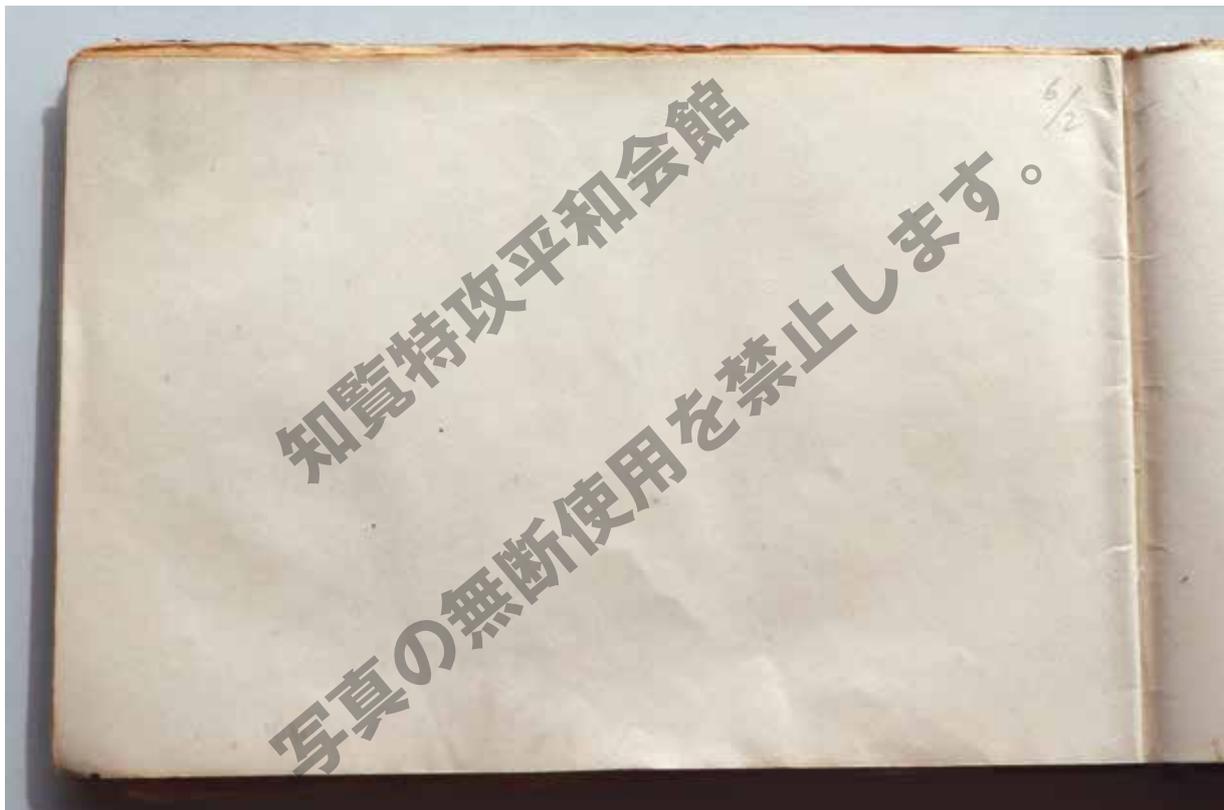


写真16 黒表紙の手帖7頁目

6
/
2

資料② 黒表紙の手帖 - 7

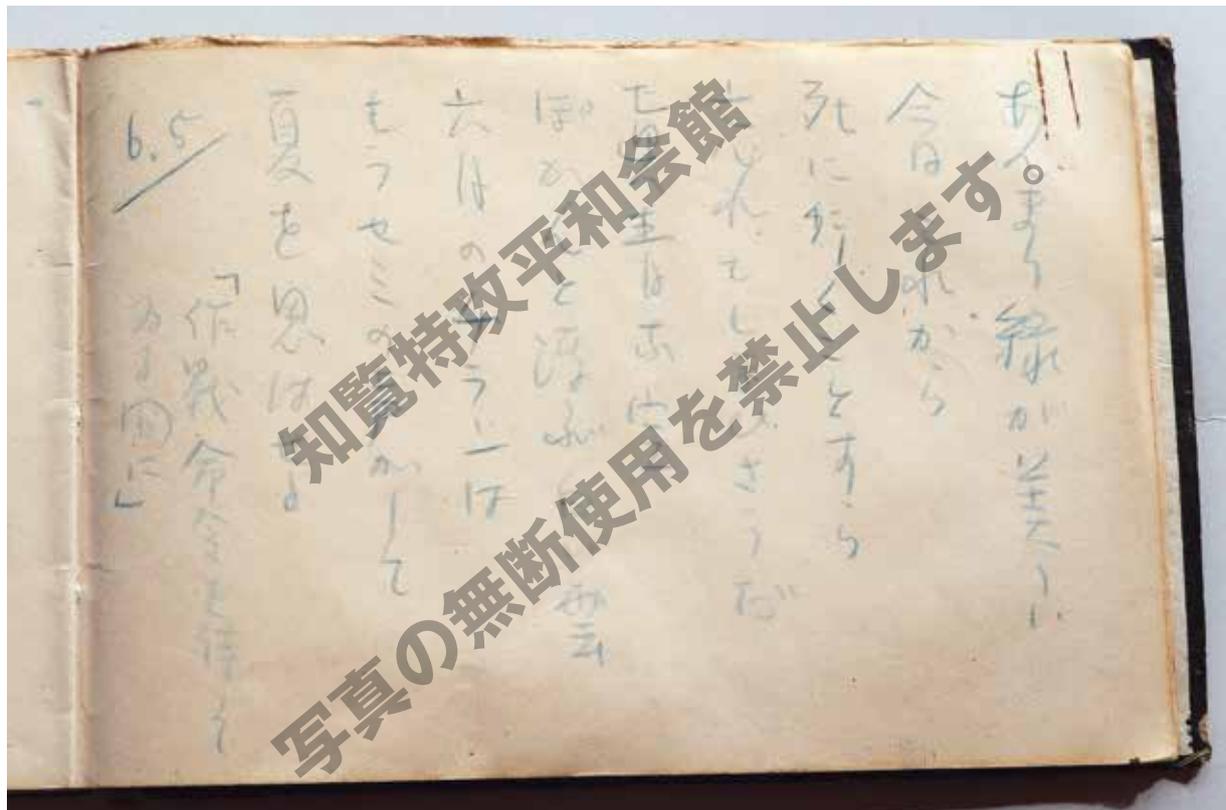


写真17 黒表紙の手帖8頁目

6.5

「ある間に」

「作戦命令を待って」

夏を思はせる

もうセミの音がして

六月のチランは

ぽかんと浮ぶ白い雲

眞青な空

忘れてしまひさうだ

死に行くことすら

今日これから

あんまり緑が美しい

資料② 黒表紙の手帖 - 8

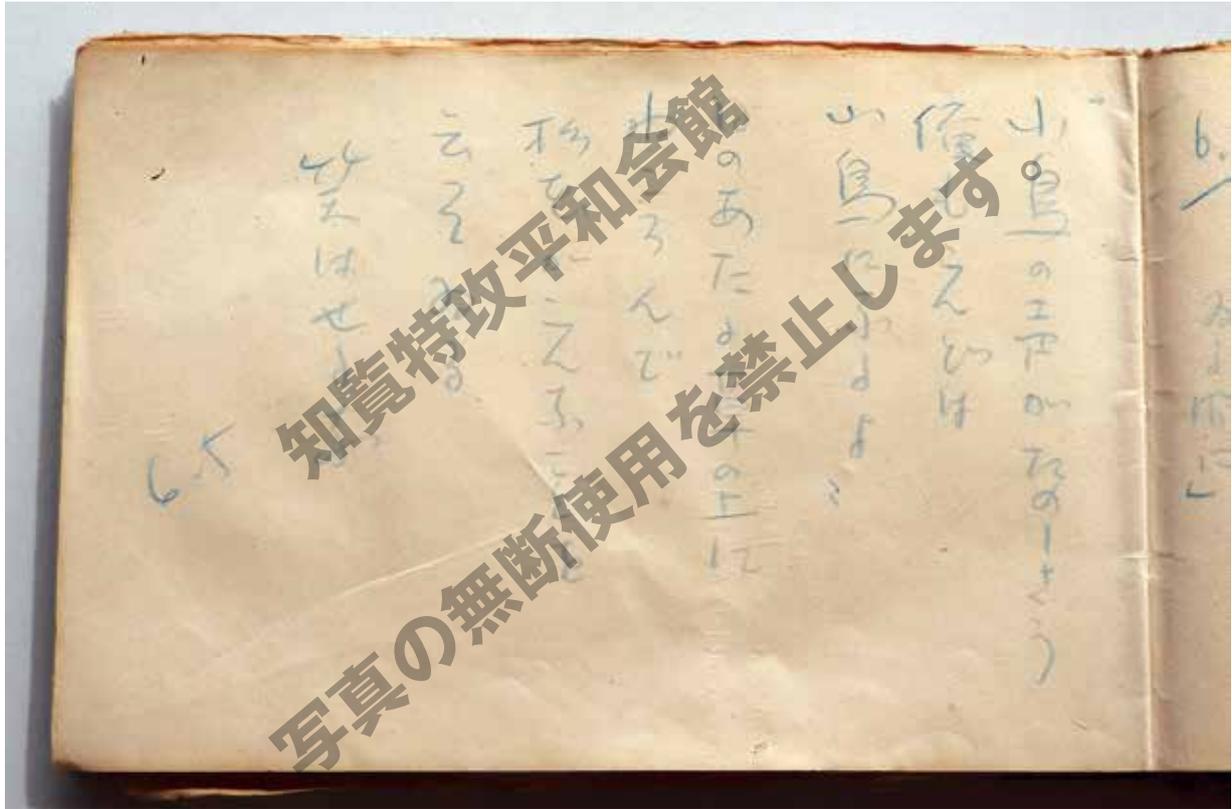


写真18 黒表紙の手帖9頁目

6.5

小鳥の声がたのしさう
 俺もこんどは
 小鳥になるよ〴〵
 日のあたる草の上に
 ねころんで
 杉本がこんなことを
 云ってゐる
 笑はせるな

資料② 黒表紙の手帖 - 8

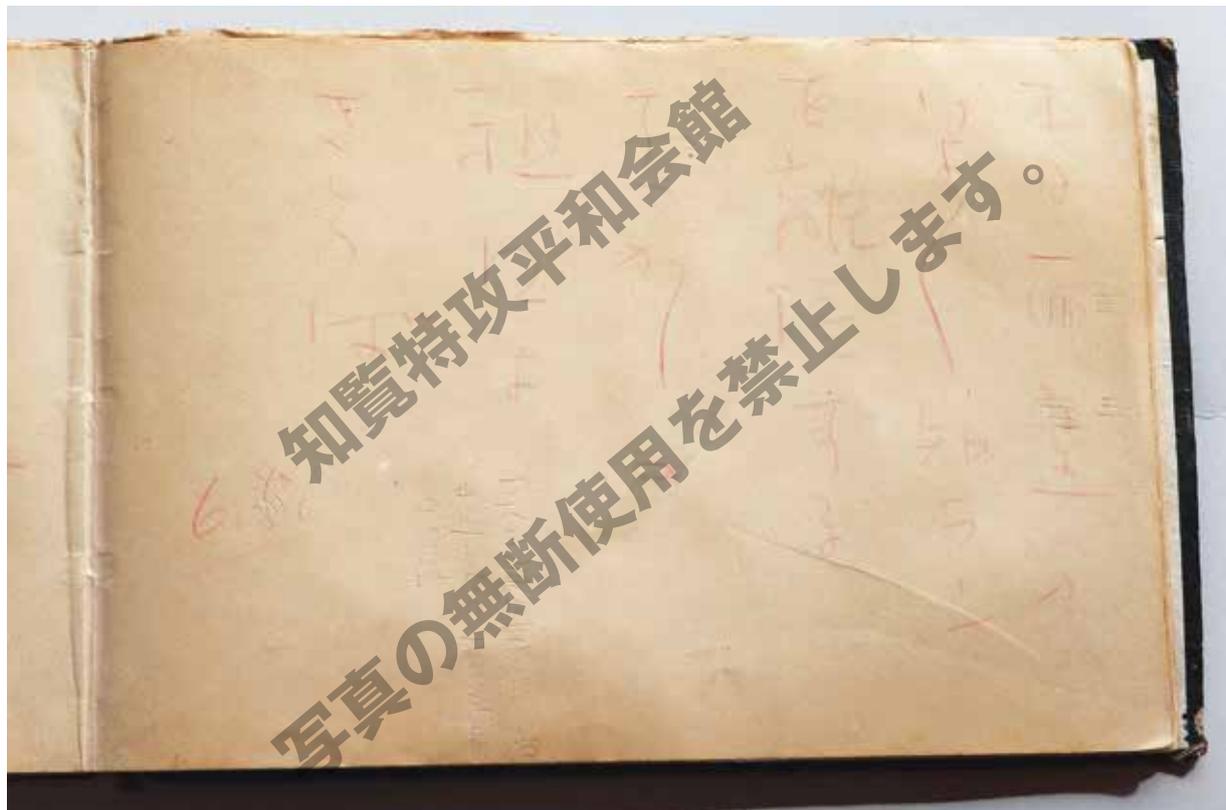


写真19 黒表紙の手帖10頁目

三三

本日一冊、五五分

いよく知ラン

を離陸する

なつかしの

祖国よ

さらば

「六月五日は暴風の為
中止となり六月六日
となった」

~~6. 5~~ 6

資料② 黒表紙の手帖 - 9

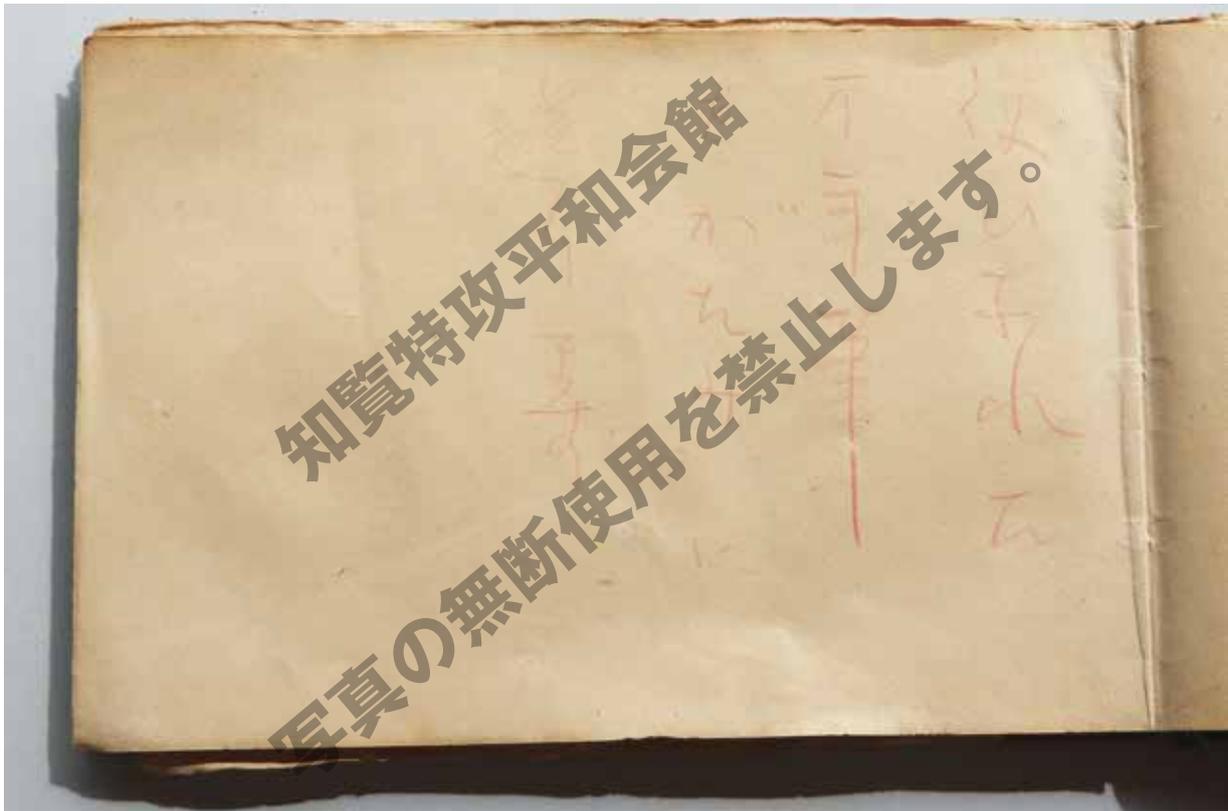


写真20 黒表紙の手帖11頁目

送ります

を「かたみ」に

万年筆

使いなれた

資料② 黒表紙の手帖 - 10

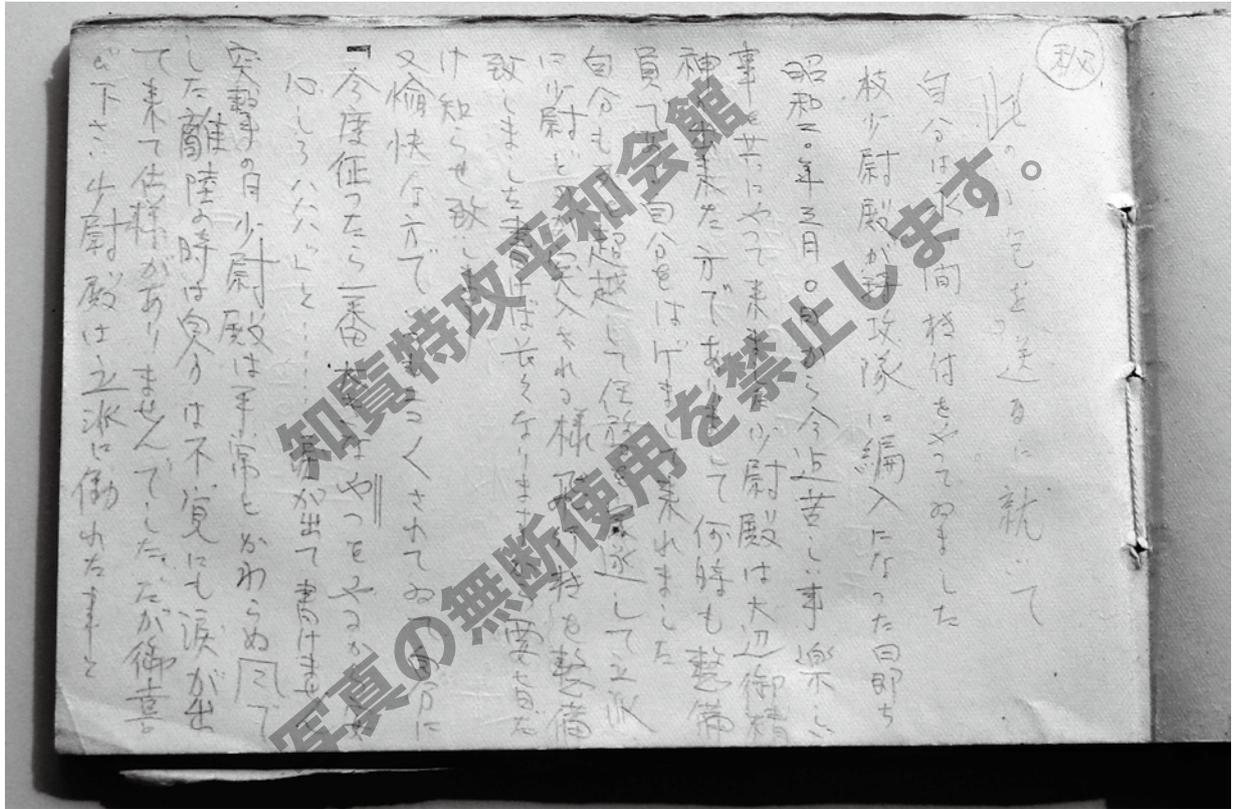
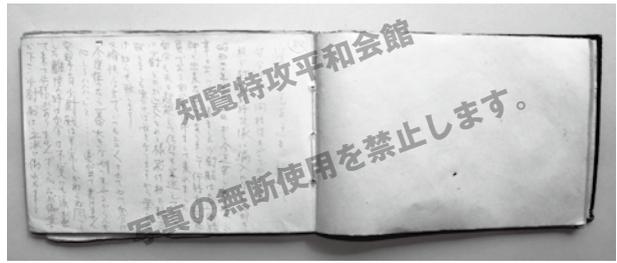


写真21 整備兵の追記

秘

此の小包を送るに就いて

自分は永い間機付きをやってゐました

枝少尉殿が特攻隊に編入になった日即ち

昭和二〇年三月〇日から今迄苦しい事楽しい

事を共にやって来ました 少尉殿は大辺御精

神の出来た方でありまして 何時も整備

員である自分をはげまして来れました

自分も死を超越して任務を完遂して立派

に少尉どのが突入される様 飛行機を整備

致しました 書けば長くなりますから要旨だ

け知らせ致します

又愉快な方でいつもニコ／＼されてゐて 自分に

「今度征つたら一番大きなやつをやるから安

心しろハハハッ」と……………涙が出て書けません

突撃の日 少尉殿は平常とかわらぬ風で

した 離陸の時は自分は不覚にも涙が出

て来て仕様がありませんでした だが御喜

び下さい 少尉殿は立派に働いた事と

資料② 黒表紙の手帖 - 11

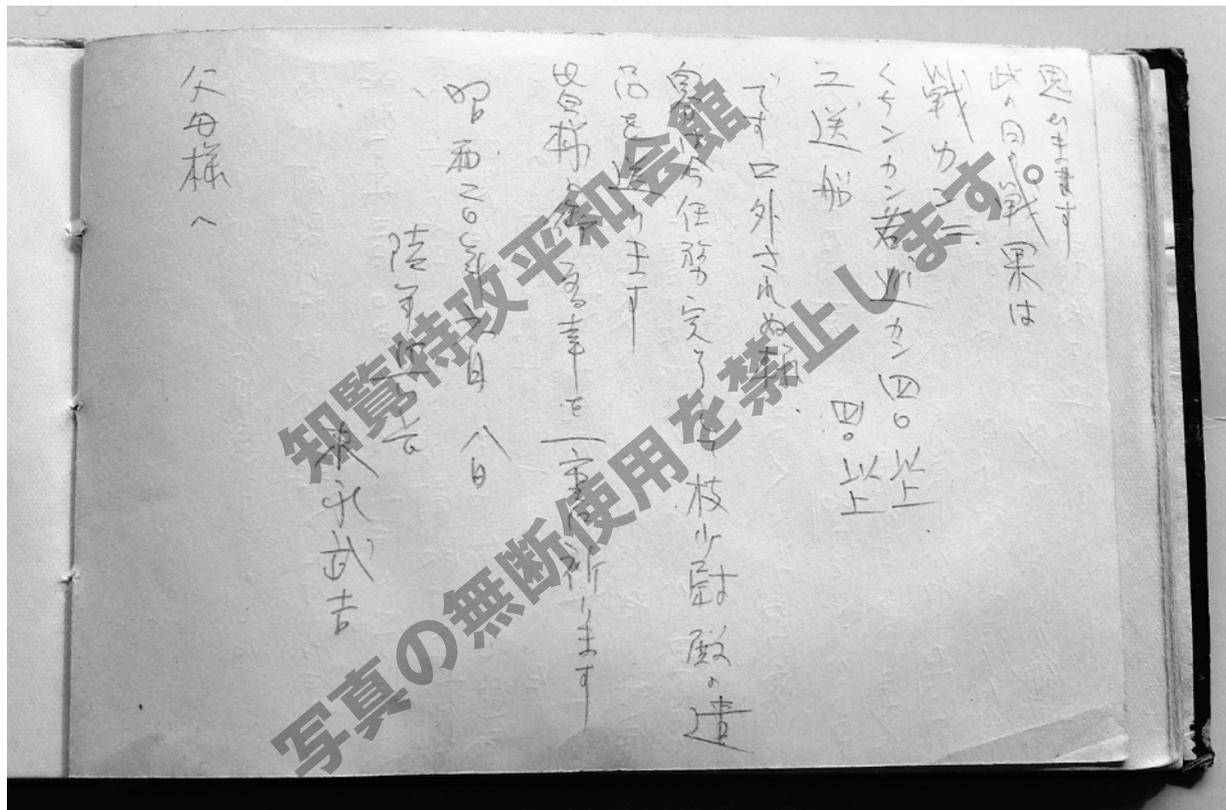
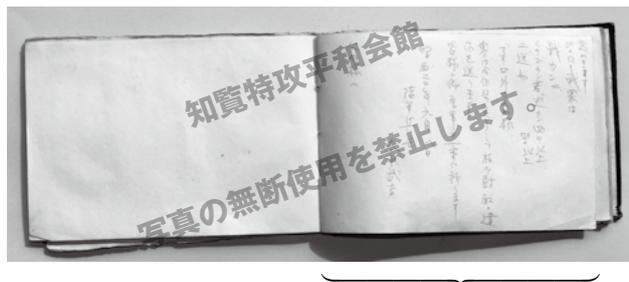


写真22 整備兵の追記

思ひます

此の日の戦果は

戦艦二

くちんカン若、巡カン

ユ送船

です 口外されぬ様

自分は今任務完了して枝少尉殿の遺

品を送ります

皆様の御多幸を一重に祈ります

昭和二〇年六月八日

陸軍兵長

末永 武吉

父母様へ

筆者注

・戦艦＝戦艦

・くちんカン若、巡カン＝駆逐艦若しくは、巡洋艦

・ユ送船＝輸送船



写真24 複写資料2枚目

別に云ふ事ありません。
 唯有難くうれしくあります。
 最後の時まで決して御恩は忘れません。
 月なみな事しか出て来ません。
 姉妹の皆さん
 いよ／＼本当にお別
 今でも例のごとくギヤ／＼皆とさわいでいま
 す。哲学的な死生観も今の小生には書物の
 内容でしかありません。
 国のため死ぬよろこびを痛切に感じてゐます。
 在世中お世話になつた方々を一人一人思い
 出します。
 時間がありません。
 たゞ心から有難うございました。
 笑つてこれから床に入ります。
 オヤメニ

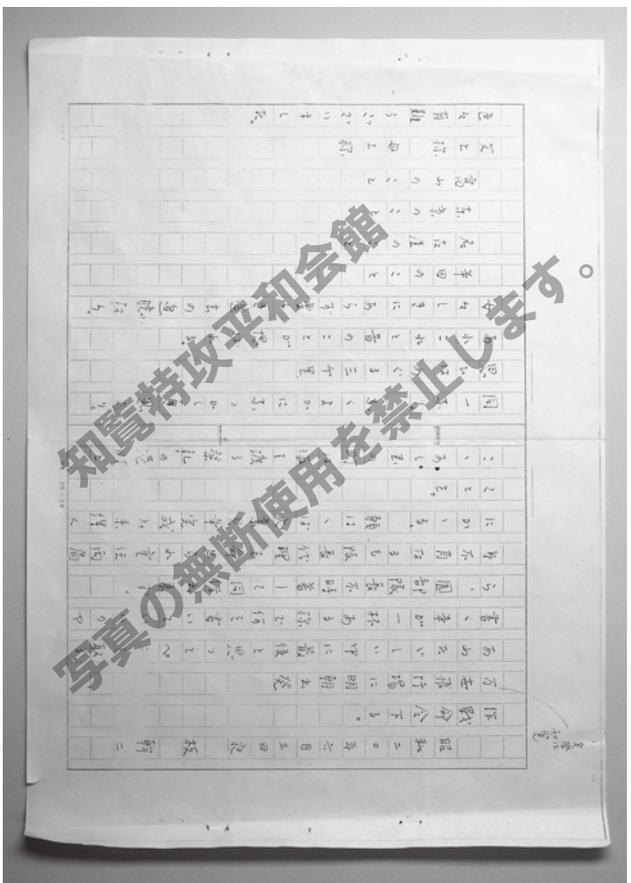


写真23 複写資料1枚目

昭和二〇年六月三日夜 枝幹二
 作戦命令下る。
 実際は知覧
 万世飛行場に明朝出発
 あわたゞしい中に最後と思つてペンを取る。
 書く事が一杯ある様で何を書いていいのや
 ら、園部隊長不時着して同行出来ず。
 身不肖なるも隊長代理を命ぜられ重任を肩
 にかゝる。願はくば大業見事完成出来得ん
 ことを。
 こゝ、あじ屋の町は、海を渡る祭礼の港町と
 同一なり。ふよよかになつかしき思あり。
 思ひはめぐる三千里。
 あれこれと昔のことが憶ばれる。
 女々しきにあらず楽しき過去の追憶なり。
 半田のこと
 名古屋のこと
 東京のこと
 富山のこと
 父上様 母上様
 色々有難うございました。

複写資料-4

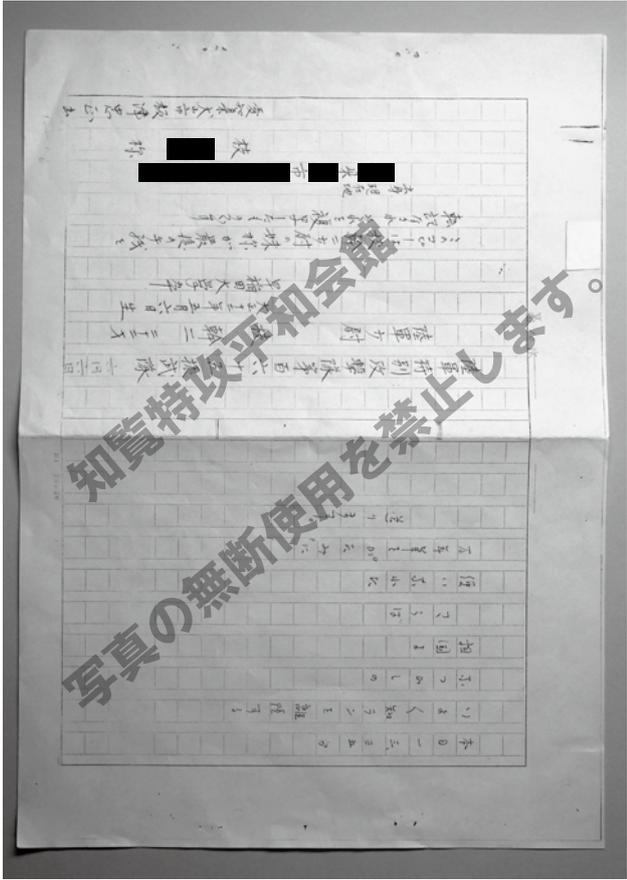


写真26 複写資料4枚目

※筆者注：個人情報保護の観点から、
遺族の住所及び名前は伏せ字
にしています。

陸軍特別攻撃隊第百六十五振隊 六月六日
陸軍少尉 枝幹 二十二才
早稲田大学卒
大正十二年五月六日生

本日一三三五分
いよく知ラシを離陸する
なつかしの
祖国よ
さらば
使いなれた
万年筆をかたみに
送ります。

複写資料-3



写真25 複写資料3枚目

あんまり緑が美しい
今日これから
死に行く事すら
忘れてしまひさうだ。
真青な空
ぽかんと浮ぶ白い雲
六月の知覧は
もうセミの声がして
夏を思はせる。

作戦命令を待っている間に
小鳥の声がたのしきう
“俺も”などは
小鳥になるよ、
日のあたる草の上に
ねころんで
杉本がこんなことを云つてゐる
笑はせるな

第10次

四. 考察

(一) 資料①「備忘日記」

富山縣護国神社遺芳館にて保管・展示されている。日記は、昭和十九年十二月二十五日から書き始められている。日記の最後の日付である昭和二十年六月三日の部分は、遺書のような内容である。「万世飛行場に明朝出発」とあるが、実際の最終出撃地は知覧飛行場で、万世飛行場を経由したか、あるいは途中で変更されたのであろう。隊長が不時着による負傷で戦列を離れ、自身が隊長代理になったことと決意の胸の内の記述に続いて、これまでの人生を回想する言葉の後に、両親や姉妹に対する遺書の文面や辞世などが書かれ、最後に「六月三日二十三時」と日時が記されている。「このあし屋のまちは」とあることから、福岡県の遠賀川河口付近に所在した陸軍芦屋飛行場にて書かれた日記であることがわかる。

(二) 資料②「黒表紙の手帖」

富山縣護国神社遺芳館にて保管・展示されている。一頁目には、特攻作戦の操縦についてのメモが記されている。「知ラン」は知覧飛行場のことで、「232」は方位を記している。真北を0として時計回りに角度を二百三十二度の方向に飛び、距離五百四十キロで二時間、沖縄県の慶良間諸島を目指すことと、飛行途中でのコック、安全栓、通信の文字もある。三頁目には、突入の際の留意点が記されている。以降には、五月三十日からの日誌が続く。六月二日は日付のみである。六月三日と四日の記載はない。

そして、その後に「あんまり緑が美しい」という言葉で始まる遺筆が四頁にわたって書かれている。「⁵」⁶」という日付が入っている。ここで興味深いのが、前半の見開き分が青鉛筆、後半が赤鉛筆で書

かれていることである。この手帳は、作戦や操縦に関して書かれていることから肌身離さず持っていたものである。おそらくは飛行地図と共に、地図に飛行経路などを書き記すために青・赤色の鉛筆を携えていたと思われる。出撃命令を待っている間にという記述からも、青・赤鉛筆の部分は、知覧飛行場の中で待機している間に書かれたことがわかる。六月五日に「今日出撃」という言葉があるが、実際には天候不良により翌六日に「今日出撃」という言葉があるが、

手帳の後半には、機付きの整備兵、末永武吉兵長が枝大尉の出撃から二日後の六月八日に、枝大尉の遺品を遺族へ送る際に枝大尉の遺族へむけて書いた添え書きが鉛筆で記されている。末永兵長は、機付きの整備兵として、出撃直前まで枝大尉の側にいた。出撃直前に、遺品とともに家族へ送るよう手帳を託されたのである。鉛筆書きであることから、赤鉛筆部分の「一四、五五」と「⁵」の数字を、延期となった日付けと時間に見え消しで訂正し、「六月五日は暴風の為中止となり六月六日となった」という注釈は、末永兵長が記入したものと、松原氏は指摘している。

なお、本文中に万年筆が登場する。末永兵長が送った遺品の中には、備忘日記と万年筆も含まれていたと思われる。備忘日記に記された六月三日の日記は万年筆で書かれているが、現代に残る特攻隊員の手紙や遺書のうち、筆記具が現存している事例は寡聞にして知らない。備忘日記、黒表紙の手帖、万年筆のセットは極めて貴重な歴史資料である。

(三) 原稿用紙に転記された「遺書」(複写資料)

知覧特攻平和会館で、枝幹二氏の「遺書」として遺品室に陳列している資料である。昭和十五年に知覧特攻平和会館へ板津忠正氏より寄託されたものである。元特攻隊員であった板津氏は、戦後は

愛知県名古屋市役所に奉職する傍ら、特攻隊員の遺族の元を行脚され遺書や手紙の原本・複写資料の収集に尽力された。退職後は、昭和五十九年から四年間、知覧特攻遺品館（昭和六十一年から知覧特攻平和会館）の事務局長を務めている。

本資料は、原稿用紙三枚半にわたって「遺書」の文面があり、四枚目の後半部分に來歴が記されている。「このコピーは枝幹二少尉の妹様が最後の手紙を転記なされ、それを複写したものです」とあり、末尾に板津忠正氏の署名がある。すなわち、この資料は枝大尉の遺族が原稿用紙に転記した二次的資料を板津氏がコピーしたものである。なお、一枚目の「実際は知覧」と、四枚目の「第10次」「六月六日」の文字は、複写物に鉛筆で追記されたものである。

原稿用紙四枚に書かれた「遺書」は、今回の調査で、原稿用紙一・二枚目は、「備忘日記」における六月三日の日記が転記されたもので、三枚目と四枚目前半は、「黒い手帖」に青・赤鉛筆で書かれた遺筆が転記されたものであることがわかった。複写資料と二つの原本資料を比較すると複数個所で相違点が見られた（下表参照）。これらの相違点は、転記の際に生じたものと思われるが、元来、公開を前提として転記されたものではなかったと察する。内容はできるだけ忠実に転記された一方で、改行箇所や、細かい文字表記は必ずしもこだわる必要はなかったであろう。

枝幹二大尉の「遺書」が、広く知られる契機となったと思われる『知覧特別攻撃隊』には、この複写資料の文面が掲載されている。末尾に、「（注・四百字詰原稿用紙三枚半にペン書き）」という記載があることからもうかがえるが、編集者の村永氏は、遺族が転記したという板津氏の説明書きは読んでいたとしても、二つの原本資料から転記されたものという事実は知り得ず、原本資料も原稿用紙であったと誤認されたと思われる。

表2 複写資料と原本資料の相違点

	複写資料（原稿用紙）		原本資料（備忘日記・黒い手帖）
相違点①	1枚目1行目	「六月三日」	備忘日記「五月」の五を見え消して「六月」に訂正
相違点②	1枚目1行目	「枝幹二」	備忘日記にはない。
相違点③	1枚目4行目	「最後」	備忘日記「最后」
相違点④	1枚目4行目	「取る」	備忘日記「とる」
相違点⑤	1枚目5行目	「一杯」	備忘日記「いっぱい」
相違点⑥	1枚目5行目	「いい」	備忘日記「い」
相違点⑦	1枚目10行目	「港町と」	備忘日記「港町のそれと」
相違点⑧	1枚目11行目	「偲ばれる」	備忘日記「しのばれる」
相違点⑨	1枚目19行目	「父上様 母上様」	備忘日記は改行あり。
相違点⑩	2枚目1行目	「事も」	備忘日記「ことも」
相違点⑪	2枚目3行目	「最後」	備忘日記「最后」
相違点⑫	2枚目4行目	「事しか」	備忘日記「ことしか」
相違点⑬	2枚目7行目	「皆と」	備忘日記「みんなと」
相違点⑭	2枚目7行目	「さわいでいます」	備忘日記「さわいでゐます」
相違点⑮	2枚目8行目	「死生観」	備忘日記「死生観」
相違点⑯	2枚目10行目	「死ぬよろこび」	備忘日記「死ぬるよろこび」
相違点⑰	2枚目11行目	「お世話」	備忘日記「おせわ」
相違点⑱	2枚目11行目	「思い」	備忘日記「思ひ」
相違点⑲	2枚目14行目・15行目の間（記載なし）		備忘日記「辞世 春風に咲いた櫻の 咲くまもあらず 唯君のため 散るをよろこぶ」「同封の通帳よしなに御処分下さい。」「津本、坂本、森野、岩永の諸家にくれぐもよろしくおつたえ下さい。」の記載がある。
相違点⑳	2枚目末尾	記載なし	備忘日記「オヤスミ」の後に「六月三日二十三時」の記載がある。
相違点㉑	3枚目3行目	「死に行く」	黒い手帖「死に行く」
相違点㉒	3枚目3行目	「事すら」	黒い手帖「ことすら」
相違点㉓	3枚目7行目	「知覧は」	黒い手帖「チランは」
相違点㉔	3枚目10行目	「 」なし	黒い手帖「 」あり。「作戦命令を待ってゐる間に」
相違点㉕	3枚目下欄	「6.5」の文字	黒い手帖は上欄に記載されている。
相違点㉖	3枚目12行目	「俺も」	黒い手帖「小鳥」（「俺」の位置）
相違点㉗	4枚目1行目	「一三、三五分」	黒い手帖「一四、五五」の四と五を鉛筆で見え消して、「一三、三五」
相違点㉘	4枚目	記載なし	黒い手帖では「6.5」の5の文字を見え消して、「6.6に訂正されている。
相違点㉙	4枚目	記載なし	黒い手帖「六月五日は暴風の為中止となり六月六日となった」

(四) 出撃時刻の問題

相違点⑦は、複写資料には「一三、三五分」と転記されているが、原本資料は「一四、五五分」と書かれた上に鉛筆で四と五を見え消して右横にそれぞれ三の字を付し訂正されている。これは、相違点①を踏まえて考えると腑に落ちる。相違点①は、枝大尉本人による誤植の訂正で、一般的に訂正前の字は読み取らない。相違点⑦は整備兵の末永兵長が、枝大尉の最期を御両親に正確に伝えて差し上げるために好意で行った訂正であるが、相違点①と同じように考えれば、わざわざ元の数字を残す必要はないと判断された。訂正後の時刻を、正しい記録として残すことに重きが置かれたのである。

その一方で、富山縣護国神社が発行した『遺芳録』では、訂正後の数字はなく、訂正前の数字のみで掲載されている。戦没者である枝大尉を、「枝幹二大尉」として祭神の一柱としておまつりしている同神社にとっては、重要なのは本人の直筆部分である。出撃が延期された時刻が変更になったのだとしても、訂正された文字は本人直筆ではないため他事記載とみなされたと推測する。

まとめ

筆者はこれまで、この複写資料を一つの「遺書」から転記されたものの複写物として捉えていた。松原氏による先行研究の成果を読み、実際に現地を訪れて原本資料と比較する作業を通して、この複写資料は、前半部分は「備忘日記」の六月三日の日記であり、後半部分は「黒い手帖」に記された遺筆を抜粋して転記されたものであり、両者には相違点が多数あることを知った。この事実は、本資料を扱う際に留意しておかねばならない。

枝幹二大尉の「遺書」は、知覧特攻平和会館が収蔵する特攻隊員

の遺書や手紙の中でもしばしば紹介されるもの一つである。「あんまり緑が美しい」で始まる文章は、館内で貸し出しているタブレット型のオーディオガイダンスや、館のノベルティとして作成しているポストカードでも取り上げられている。出撃当日の文章としては、遺書というよりも詩のような表現で書かれている。最期に書かれたものという意味では遺筆と呼ぶこともできる。数日前の日記に書かれた遺書と、出撃直前に書かれた遺筆とを比較することで、特攻隊員の心境の変化が読み取れる可能性があり、貴重な歴史資料である。

この複写資料は、遺族の手による転記物を、元特攻隊員で、知覧特攻平和会館の資料収集に尽力した板津氏が複写したものである。筆者は、特攻の史実を後世に語り継いでいくためには、原本資料の保存だけでなく、遺族や関係者が遺品とどう向き合ってきたのかということも大切なことであると考ええる。本資料は、原稿用紙に転記した遺族と複写した元特攻隊員の両者が関わらなければ存在しなかった。このような遺族と関係者による戦後の慰霊という行為もまた、後世に語り継いでいく特攻の史実を構成する一要素であるという視点に立てば、複写資料であるとしても、複写資料としての資料的価値を見出すことができると考えている。

そして最後に再度提起しておきたいことは、これまで知覧特攻平和会館では、この複写資料を「枝幹二大尉の遺書」として捉えてきたが、書かれている内容は別々な手記資料として認識をあらたにしなければならぬ。資料名称としては、原本資料を保管する富山縣護国神社の刊行物及び、遺芳館の展示キャプションでの名称を尊重して、「備忘日記」に記された「遺書」、「黒表紙の手帖」に記された「最後の記」と呼称しておくことにしたい。

最後になりましたが、本稿を執筆するにあたり富山縣護国神社の

梅野守雄宮司、梅野高広禰宜をはじめ同神社の皆様には大変お世話になりました。感謝申し上げます。

注・知覧特攻平和会館では、特攻戦没者は戦死後の階級を敬称として用いています。枝幹二大尉は、日記や手帳に記した段階では少尉ですが、本稿では大尉で通しました。また、富山縣護国神社では枝幹二命としておまつりされていることを付記しておきます。

参考文献

- ・村永薫編一九八九『知覧特別攻撃隊』ジャプラン
- ・遺芳録編輯委員会編二〇〇一『遺芳録』富山縣護国神社創建九十周年記念 富山縣護国神社
- ・松原洋子二〇一六「戦（いくさ）と向かい合う【その1】」兵士の遺書を読み解くことで命を見つめ、伝える言葉の力を実感しよう、教材の開発」東京学芸大学附属小金井中学校『研究紀要』第五二号 一六五～一七六頁

(さかもと・こうた 南九州市世界の記憶推進室主任主査(学芸員))

<要旨>

知覧特攻平和会館の収蔵品の中には、特攻隊員直筆の実物資料以外にも、複製品や模写資料も含まれている。本稿では、複写資料のうち、由緒と原本の所在が明らかな枝幹二大尉の「遺書」の原本調査を行った。知覧特攻平和会館資料と富山縣護国神社資料との間に相違点があることは、すでに松原洋子氏の研究で指摘されていた。本稿では、知覧特攻平和会館に収蔵されている枝幹二大尉の「遺書」は、富山県富山市に所在する富山縣護国神社に奉納された2つの原本資料、日記と手帳から抜粋して、遺族が原稿用紙に転記したものの複写物であることを明らかにした。

1つ目の原本資料である日記からは、枝大尉が出撃する3日前に書かれた昭和20年6月3日に万年筆で記された遺書のような内容が転記され、2つ目の原本資料である手帳からは、出撃当日（実際には延期となり1日前）に色鉛筆で記された遺筆、「あんまり緑が美しい」という書き出しで始まる詩が転記されている。本稿では、原本と複写資料とを比較し、相違点やカットされた部分を一覧にまとめた。

知覧特攻平和会館は、これらのことを留意しておく必要がある。しかしながら、原本資料の保存だけでなく、遺族や関係者が遺品とどう向き合ってきたのかということも、特攻の史実を語り継ぐ上で大切なことであろう。本資料は、遺族が転記したものを、戦後に手紙や遺書の収集に尽力した元特攻隊員が複写したという2つの行為が加わったことで存在している。遺族と関係者による戦後の慰霊という史実もまた、後世に語り継いでいくという視点に立てば、この複写資料の資料的価値を見出すことができると考えている。

<Summary>

A comparative study of genuine and copied documents: A study of Senior Pilot Kanji Eda's original last will and testament

The Chiran Peace Museum's collection includes the Kamikaze Pilots' own handwritten genuine documents, and a number of original copies and reproductions.

In this paper we examined a copy of Senior Pilot Kanji Eda's last will and testament, kept at the Chiran Peace Museum, especially chosen because the original document's location is known and its history is well documented.

Previous research done by Yoko Matsubara indicated that some difference existed between Chiran Peace Museum's copy of the will and the original kept at the Toyama-ken Gokoku Shrine.

This paper shows that the copy of Senior Pilot Kanji Eda's will stored at Chiran Peace Museum was in fact transcribed by his family from two original sources: his diary and notebook, both stored at the Toyama-ken Gokoku Shrine.

The content of the copy held at Chiran Peace Museum contains parts extracted from Senior Pilot Eda's diary written with a fountain pen three days before his sortie on June 3rd, Year of Showa 20, and parts extracted from his notebook, written with color pencils on the day of his sortie (which had been postponed by one day), beginning with the words "The new green leaves are so beautiful."

In this paper, I have compared the original documents and our copy, and tabled the differences and the parts that were not present in our copy.

Chiran Peace Museum needs to be aware that such differences may exist in their documents. At the same time, when passing on the history of Tokko, not only is it extremely important to store the original material, but to also to know how the family and former kamikaze pilots dealt with the material left by the kamikaze pilots who died.

These wills and letters exist because they were kept by family members, or transcribed by former-kamikaze pilots who devoted themselves to collecting them after the war.

We believe that historical value can be found in these transcribed documents in that they show how the family members of kamikaze pilots, and postwar former-kamikaze pilots sought solace in these actions, and that the Chiran Peace Museum has a role in passing on these stories onto future generations.